

講演会 & ライブ な日々 ④⑥

古川 秀明

『般若心経とオープンダイログ 6』

祈祷師も老婆が厳かに語りだした。

「この子は産まれる前に山の猟師をしておった。その時に畏にかかった狐の首を持って
いた鉈で切り落としたのじゃ。そのことを恨みに思った狐が祟っておるのじゃ」

私は生まれる前に猟師であったことも、狐の首を切り落としたことも、まったく記憶にな
かったので驚いた。

「そういえばこの子はよく、動物のおもちゃで遊んでいます」と母が思い当たったように
言った。

「それじゃ、それじゃ。それこそ祟られている証拠に違いないわい」

私は動物のフィギアが好きでただ夢中で遊んでいただけなのに、そんな祟りがあったと
は知らなかった。

「だけどお導師様、狐を殺したのに、なんでいろんな動物のおもちゃで遊ぶのですか？」
と母が尋ねた。

「それは狐があらゆる動物に姿を変えて、自分の無念をこの子に訴えかけておるのじゃ」
と老婆が答えた。

私はもう少しで腰が抜けそうだった。

そんな恐ろしい祟りであれば、やっぱりいずれ呪い殺されるに違いない。

それでなくても死ぬのが怖くて眠れないのに、このままではもっと眠れなくなりそうだ。

「それでお導師様、私の孫は助かりますでしょうか？」

祖母が両手を合わせながら尋ねると、老婆は紙垂をバサバサと振り回し、厳かに告げた。

「心配いらぬ。わしの言う通りにすれば、この子の祟りはたちどころに消え失せてしまうじゃろう」

その言葉に家族一同、胸をなでおろした。

「よいか、よく聞け。この子に憑いておる狐を鎮めるために、この子に狐の大好物である油揚げを食べさせるのじゃ。食べさせるのは毎月決まって1の付く日、つまり、1日、11日、21日、31日。それからその日には必ずお稲荷様にお参りするのじゃ。できれば伏見稲荷が良いが、近くのお稲荷様でもかまわぬ」

老婆の言葉を祖母が何かのメモ用紙に書き留めた。

「それからこの魔よけのまじないが書いた絵をこの子の寝ている天井に張り付けるのじゃ」

渡された絵には九尾の狐が書かれており、目だけが不気味に赤く塗られていた。狐の横には朱色の墨で書かれた、何かまじないのような言葉が書いてあった。

「魔よけの絵を天井に張り付けたら、この靈験あらたかなお札を家の神棚にお祀りして、毎日新鮮なお水をささげるのじゃ」

「あのお、お導師様、うちには神棚がありません」と母が恐る恐る言った」

「そうか、それならばその家で一番大きな柱に張り付けておくとよろしい」

老婆がそう言うと、また紙垂をバサバサと振り回すと、巫女さんが太鼓を叩いて「お導師様、ご退出～」と宣言した。

それから母が祈祷料を支払った。

母の顔は蒼ざめていた。

なんと腰を抜かすほど高額だったのだ。

その様子を見た祖母が「自分が紹介したから、祈祷料は自分が出す」と言った。

母の顔が見る見るうちに明るくなった。

しかし、その日から私には地獄の日々が待っていた。

(次号に続きます)

シンガーソングライター

ふるかわひであき